俊寛

芥川龍之介

俊寛云いけるは……神明外になし。唯我等が一念なり。……唯仏法を修行して、今度生死を出で給うべし。　源平盛衰記

（俊寛）いとど思いの深くなれば、かくぞ思いつづけける。「見せばやな我を思わぬ友もがな磯のとまやの柴の庵を。」同上

一

俊寛様の話ですか？　俊寛様の話くらい、世間に間違って伝えられた事は、まずほかにはありますまい。

いや、俊寛様の話ばかりではありません。このわたし、――有王自身の事さえ、飛でもない嘘が伝わっているのです。現についこの間も、ある琵琶法師が語ったのを聞けば、俊寛様は御歎きの余り、岩に頭を打ちつけて、狂い死をなすってしまうし、わたしはその御死骸を肩に、身を投げて死んでしまったなどと、云っているではありませんか？　またもう一人の琵琶法師は、俊寛様はあの島の女と、夫婦の談らいをなすった上、子供も大勢御出来になり、都にいらしった時よりも、楽しい生涯を御送りになったとか、まことしやかに語っていました。前の琵琶法師の語った事が、跡方も

ない嘘だと云う事は、この有王が生きているのでも、おわかりになるかと思いますが、後の琵琶法師の語った事も、やはり好い加減の出たらめなのです。

　一体琵琶法師などと云うものは、どれもこれも我は顔に、嘘ばかりついているものなのです。が、その嘘のうまい事は、わたしでも褒めずにはいられません。わたしはあの笹葺の小屋に、俊寛様が子供たちと、御戯れになる所を聞けば、思わず微笑を浮べましたし、またあの浪音の高い月夜に、狂い死をなさる所を聞けば、つい涙さえ落しました。たとい嘘とは云うものの、ああ云う琵琶法師の語った嘘は、きっと琥珀の中の虫

のように、末代までも伝わるでしょう。して見ればそう云う嘘があるだけ、わたしでも今の内ありのままに、俊寛様の事を御話しないと、琵琶法師の嘘はいつのまにか、ほんとうに変ってしまうかも知れない――と、こうあなたはおっしゃるのですか？　なるほどそれもごもっともです。ではちょうど夜長を幸い、わたしがはるばる鬼界が島へ、俊寛様を御尋ね申した、その時の事を御話しましょう。しかしわたしは琵琶法師のように、上手にはとても話されません。ただわたしの話の取り柄は、この有王が目のあたりに見た、飾りのない真実と云う事だけです。ではどうかしばらくの間、

御退屈でも御聞き下さい。

二

わたしが鬼界が島に渡ったのは、治承（じしょう）三年五月の末、ある曇った午（ひる）過ぎです。これは琵琶法師も語る事ですが、その日もかれこれ暮れかけた時分、わたしはやっと俊寛（しゅんかん）様に、めぐり遇（あ）う事が出来ました。しかもその場所は人気（ひとけ）のない海べ、——ただ灰色の浪（なみ）ばかりが、砂の上に寄せては倒れる、いかにも寂しい海べだったのです。

俊寛様のその時の御姿は、――そうです。世間に伝わっているのは、「童かとすれば年老いてその貌にあらず、法師かと思えばまた髪は空ざまに生い上りて白髪多し。よろずの塵や藻屑のつきたれども打ち払わず。頸細くして腹大きに脹れ、色黒うして足手細し。人にして人に非ず。」と云うのですが、これも大抵は作り事です。殊に頸が細かったの、腹が脹れていたのと云うのは、地獄変の画からでも思いついたのでしょう。つまり鬼界が島と云う所から、餓鬼の形容を使ったのです。なるほどその時の俊寛様は、髪も延びて御出でになれば、色も日に焼けていらっしゃいましたが、そ

のほかは昔に変らない、——いや、変らないどころではありません。昔よりも一層丈夫そうな、頼もしい御姿だったのです。それが静かな潮風に、法衣の裾を吹かせながら、浪打際を独り御出でになる、——見れば御手には何と云うのか、笹の枝に貫いた、小さい魚を下げていらっしゃいました。

「僧都の御房！　よく御無事でいらっしゃいました。わたしです！　有王です！」

　わたしは思わず駈け寄りながら、嬉しまぎれにこう叫びました。

「おお、有王か！」

俊寛様は驚いたように、わたしの顔を御覧になりました。が、もうわたしはその時には、御主人の膝を抱(だ)いたまま、嬉し泣きに泣いていたのです。

「よく来たな。有王！　おれはもう今生(こんじょう)では、お前にも会えぬと思っていた。」

俊寛様もしばらくの間(あいだ)は、涙ぐんでいらっしゃるようでしたが、やがてわたしを御抱き起しになると、

「泣くな。泣くな。せめては今日(きょう)会っただけでも、仏菩薩(ぶつぼさつ)の御慈悲(ごじひ)と思うが好(よ)い。」と、親のように慰めて下さいました。

「はい、もう泣きは致しません。御房(ごぼう)は、――御房の

御住居（おすまい）は、この界隈（かいわい）でございますか？」
「住居か？　住居はあの山の陰（かげ）じゃ。」
俊寛様は魚を下げた御手に、間近い磯山（いそやま）を御指しになりました。
「住居と云っても、檜肌葺（ひわだぶ）きではないぞ。」
「はい、それは承知して居ります。何しろこんな離れ島でございますから、――」
わたしはそう云いかけたなり、また涙に咽（むせ）びそうにしました。すると御主人は昔のように、優しい微笑を御見せになりながら、
「しかし居心（いごころ）は悪くない住居じゃ。寝所（ねどころ）もお前には不

自由はさせぬ。では一しょに来て見るが好（よ）い。」と、気軽に案内をして下さいました。

しばらくの後（のち）わたしたちは、浪ばかり騒がしい海べから、寂しい漁村（ぎょそん）へはいりました。薄白い路の左右には、梢（こずえ）から垂れた榕樹（あこう）の枝に、肉の厚い葉が光っている、——その木の間に点々と、笹葺（ささぶ）きの屋根を並べたのが、この島の土人の家なのです。が、そう云う家の中に、赤々（あかあか）と竈（かまど）の火が見えたり、珍らしい人影が見えたりすると、とにかく村里へ来たと云う、懐（なつか）しい気もちだけはして来ました。

御主人は時々振り返りながら、この家にいるのは

琉球人（りゅうきゅうじん）だとか、あの檻（おり）には豕（いのこ）が飼ってあるとか、いろいろ教えて下さいました。しかしそれよりも嬉しかったのは、烏帽子（えぼし）さえかぶらない土人の男女が、俊寛様の御姿を見ると、必ず頭を下げた事です。殊に一度なぞはある家の前に、鶏（とり）を追っていた女の児さえ、御時宜（おじぎ）をしたではありませんか？　わたしは勿論嬉しいと同時に、不思議にも思ったものですから、何か訳のある事かと、そっと御主人に伺（うかが）って見ました。

「成経（なりつね）様や康頼（やすより）様が、御話しになった所では、この島の土人も鬼（おに）のように、情（なさけ）を知らぬ事かと存じましたが、――」

「なるほど、都にいるものには、そう思われるに相違あるまい。が、流人（るにん）とは云うものの、おれたちは皆都人（みやこびと）じゃ。辺土（へんど）の民はいつの世にも、都人と見れば頭を下げる。業平（なりひら）の朝臣（あそん）、実方（さねかた）の朝臣、――皆大同小異ではないか？　ああ云う都人もおれのように、東（あずま）や陸奥（みちのく）へ下（くだ）った事は、思いのほか楽しい旅だったかも知れぬ。」

「しかし実方の朝臣などは、御隠れになった後（のち）でさえ、都恋しさの一念から、台盤所（だいばんどころ）の雀（すずめ）になったと、云い伝えて居（お）るではありませんか？」

「そう云う噂（うわさ）を立てたものは、お前と同じ都人じゃ。

鬼界が島の土人と云えば、鬼のように思う都人じゃ。して見ればこれも当てにはならぬ。」
その時また一人御主人に、頭を下げた女がいました。これはちょうど榕樹の陰に、幼な児を抱いていたのですが、その葉に後を遮られたせいか、紅染めの単衣を着た姿が、夕明りに浮んで見えたものです。すると御主人はこの女に、優しい会釈を返されてから、
「あれが少将の北の方じゃぞ。」と、小声に教えて下さいました。
わたしはさすがに驚きました。
「北の方と申しますと、——成経様はあの女と、夫婦

になっていらしったのですか？」

俊寛様は薄笑いと一しょに、ちょいと頷（うなず）いて御見せになりました。

「抱いていた児も少将の胤（たね）じゃよ。」

「なるほど、そう伺って見れば、こう云う辺土（へんど）にも似合わない、美しい顔をして居りました。」

「何、美しい顔をしていた？　美しい顔とはどう云う顔じゃ？」

「まあ、眼の細い、頬（ほお）のふくらんだ、鼻の余り高くない、おっとりした顔かと思いますが、――」

「それもやはり都の好みじゃ。この島ではまず眼の大

きい、頬のどこかほっそりした、鼻も人よりは心もち高い、きりりした顔が尊まれる。そのために今の女なぞも、ここでは誰も美しいとは云わぬ。」

　わたしは思わず笑い出しました。

「やはり土人の悲しさには、美しいと云う事を知らないのですね。そうするとこの島の土人たちは、都の上臈（じょうろう）を見せてやっても、皆醜（みにく）いと笑いますかしら？」

「いや、美しいと云う事は、この島の土人も知らぬではない。ただ好みが違っているのじゃ。しかし好みと云うものも、万代不変（ばんだいふへん）とは請合（うけあ）われぬ。その証拠には御寺御寺（みてら）の、御仏（みほとけ）の御姿（みすがた）を拝むが好（よ）い。三界六道（さんがいろくどう）の教

主、十方最勝、光明無量、三学無碍、億億衆生引導の能化、南無大慈大悲釈迦牟尼如来も、三十二相八十種好の御姿は、時代ごとにいろいろ御変りになった。御仏でもしもそうとすれば、如何かこれ美人と云う事も、時代ごとにやはり違う筈じゃ。都でもこの後五百年か、あるいはまた一千年か、とにかくその好みの変る時には、この島の土人の女どころか、南蛮北狄の女のように、凄まじい顔がはやるかも知れぬ。」

「まさかそんな事もありますまい。我国ぶりはいつの世にも、我国ぶりでいる筈ですから。」

「所がその我国ぶりも、時と場合では当てにならぬ。

たとえば当世の上﨟（じょうろう）の顔は、唐朝（とうちょう）の御仏（みほとけ）に活写（いきうつ）しじゃ。これは都人（みやこびと）の顔の好みが、唐土（もろこし）になずんでいる証拠（しょうこ）ではないか？　すると人皇（にんおう）何代かの後（のち）には、碧眼（へきがん）の胡人（えびす）の女の顔にも、うつつをぬかす時がないとは云われぬ。」

　わたしは自然とほほ笑（え）みました。御主人は以前もこう云う風に、わたしたちへ御教訓なすったのです。「変らぬのは御姿ばかりではない。御心もやはり昔のままだ。」——そう思うと何だかわたしの耳には、遠い都の鐘の声も、通（かよ）って来るような気がしました。が、御主人は榕樹（あこう）の陰に、ゆっくり御み足を運びながら、こん

な事もまたおっしゃるのです。

「有王。おれはこの島に渡って以来、何が嬉しかったか知っているか？　それはあのやかましい女房（にょうぼう）のやつに、毎日小言（こごと）を云われずとも、暮されるようになった事じゃよ。」

三

その夜（よ）わたしは結（ゆ）い燈台（とうだい）の光に、御主人の御飯を頂きました。本来ならばそんな事は、恐れ多い次第なのですが、御主人の仰（おお）せもありましたし、御給仕にはこ

の頃御召使いの、兎唇(みつくち)の童(わらべ)も居りましたから、御招伴(ごしょうばん)に預(あずか)った訳なのです。

御部屋は竹縁(ちくえん)をめぐらせた、僧庵(そうあん)とも云いたい拵(こしら)えです。縁先に垂れた簾(すだれ)の外には、前栽(せんざい)の竹(たか)むらがあるのですが、椿(つばき)の油を燃やした光も、さすがにそこまでは届きません。御部屋の中には皮籠(かわご)ばかりか、厨子(ずし)もあれば机もある、——皮籠は都を御立ちの時から、御持ちになっていたのですが、厨子や机はこの島の土人が、不束(ふつつか)ながらも御拵(おこしら)え申した、琉球赤木(りゅうきゅうあかぎ)とかの細工(さいく)だそうです。その厨子の上には経文(きょうもん)と一しょに、阿弥陀如来(あみだにょらい)の尊像が一体、端然と金色(こんじき)に輝いてい

ました。これは確か康頼様の、都返りの御形見だとか、伺ったように思っています。

俊寛様は円座の上に、楽々と御坐りなすったまま、いろいろ御馳走を下さいました。勿論この島の事ですから、酢や醤油は都ほど、味が好いとは思われません。が、その御馳走の珍しい事は、汁、鱠、煮つけ、果物、――名さえ確かに知っているのは、ほとんど一つもなかったくらいです。御主人はわたしが呆れたように、箸もつけないのを御覧になると、上機嫌に御笑いなさりながら、こう御勧め下さいました。

「どうじゃ、その汁の味は？　それはこの島の名産の、

臭梧桐(くさぎり)と云う物じゃぞ。こちらの魚(うお)も食うて見るが好(よ)い。これも名産の永良部鰻(えらぶうなぎ)じゃ。あの皿にある白地鳥(しろちどり)、――そうそう、あの焼き肉じゃ。――それも都(みやこ)などでは見た事もあるまい。白地鳥と云う物は、背の青い、腹の白い、形は鸛(こう)にそっくりの鳥じゃ。この島の土人はあの肉を食うと、湿気(しっき)を払うとか称(とな)えている。その芋(いも)も存外味は好(よ)いぞ。名前か？　名前は琉球芋(りゅうきゅういも)じゃ。梶王(かじおう)などは飯の代りに、毎日その芋を食うている。」

梶王と云うのはさっき申した、兎唇(みつくち)の童(わらべ)の名前なのです。

「どれでも勝手に箸(はし)をつけてくれい。粥(かゆ)ばかり啜(すす)って

いさえすれば、得脱するように考えるのは、沙門にあり勝ちの不量見じゃ。世尊さえ成道される時には、牧牛の女難陀婆羅の、乳糜の供養を受けられたではないか？　もしあの時空腹のまま、畢波羅樹下に坐っていられたら、第六天の魔王波旬は、三人の魔女なぞを遣すよりも、六牙象王の味噌漬けだの、天竜八部の粕漬けだの、天竺の珍味を降らせたかも知らぬ。もっとも食足れば淫を思うのは、我々凡夫の慣いじゃから、乳糜を食われた世尊の前へ、三人の魔女を送ったのは、波旬も天っ晴見上げた才子じゃ。が、魔王の浅間しさには、その乳糜を献じたものが、女人じゃと云う事を

忘れて居った。牧牛の女難陀婆羅、世尊に乳糜を献じ奉る、——世尊が無上の道へ入られるには、雪山(せつざん)六年の苦行よりも、これが遥かに大事だったのじゃ。『取彼乳糜(かのにゅうびをとり)　如意飽食(いのごとくほうしょくし)、　悉皆浄尽(しっかいじょうじんす)。』——仏本行経(ぶっほんぎょうきょう)七巻の中(うち)にも、あれほど難有(ありがた)い所は沢山あるまい。——『爾時菩薩食糜(そのときぼさつびをしょくし)　已訖従座而起(すでにおわりてざよりしてたつ)。安庠漸々(あんじょうにぜんぜん)　向菩提樹(ぼだいじゅにむかう)。』どうじゃ。『安庠漸々(あんじょうにぜんぜん)向菩提樹(ぼだいじゅにむかう)。』女人(にょにん)を見、乳糜に飽(あ)かれた、端厳微妙(たんごんみみょう)の世尊の御姿が、目(ま)のあたりに拝(おが)まれるようではないか？」

俊寛様は楽しそうに、晩の御飯をおしまいになると、

今度は涼しい竹縁(ちくえん)の近くへ、円座(わろうだ)を御移しになりながら、
「では空腹が直ったら、都(みやこ)の便りでも聞かせて貰おう。」とわたしの話を御促(おうなが)しになりました。
わたしは思わず眼を伏せました。兼ねて覚悟はしていたものの、いざ申し上げるとなって見ると、今更のように心が怯(おく)れたのです。しかし御主人は無頓着に、芭蕉(ばしょう)の葉の扇(おうぎ)を御手にしたまま、もう一度御催促(ごさいそく)なさいました。
「どうじゃ、女房は相不変(あいかわらず)小言(こごと)ばかり云っているか？」
わたしはやむを得ず俯向(うつむ)いたなり、御留守(おるす)の間(あいだ)に

出来（しゅったい）した、いろいろの大変を御話しました。御主人が御捕（おとら）われなすった後（のち）、御近習（ごきんじゅ）は皆逃げ去った事、京極（きょうごく）の御屋形（おやかた）や鹿ケ谷（ししがたに）の御山荘も、平家（へいけ）の侍に奪われた事、北（きた）の方（かた）は去年の冬、御隠れになってしまった事、若君も重い疱瘡（もがさ）のために、その跡を御追いなすった事、今ではあなたの御家族の中でも、たった一人姫君（ひめぎみ）だけが、奈良（なら）の伯母御前（おばごぜ）の御住居（おすまい）に、人目を忍んでいらっしゃる事、――そう云う御話をしている内に、わたしの眼にはいつのまにか、燈台の火影（ほかげ）が曇って来ました。軒先の簾（すだれ）、廚子（ずし）の上の御仏（みほとけ）、――それももうどうしたかわかりません。わたしはとうとう御話半（なか）ば

に、その場へ泣き沈んでしまいました。御主人は始終黙然（もくねん）と、御耳を傾けていらしったようです。が、姫君の事を御聞きになると、突然さも御心配そうに、法衣（ころも）の膝を御寄せになりました。

「姫はどうじゃ？　伯母御前にはようなついているか？」

「はい。御睦（おむつ）ましいように存じました。」

わたしは泣く泣く俊寛様へ、姫君の御消息（ごしょうそく）をさし上げました。それはこの島へ渡るものには、門司（もじ）や赤間（あかま）が関（せき）を船出する時、やかましい詮議（せんぎ）があるそうですから、髻（もとどり）に隠して来た御文（おふみ）なのです。御主人は早速（さっそく）燈

台の光に、御消息をおひろげなさりながら、ところどころ小声に御読みになりました。

「……世の中かきくらして晴るる心地なく侍り。……さても三人一つ島に流されけるに、……などや御身一人残り止まり給うらんと、……都には草のゆかりも枯れはてて、……当時は奈良の伯母御前の御許に侍り。……おろそかなるべき事にはあらねど、かすかなる住居推し量り給え。……さてもこの三とせまで、いかに御心強く、有とも無とも承わらざるらん。……とくとく御上り候え。恋しとも恋し。ゆかしともゆかし。……あなかしこ、あなかしこ。……」

俊寛様は御文を御置きになると、じっと腕組みをなすったまま、大きい息をおつきになりました。

「姫はもう十二になった筈じゃな。――おれも都には未練はないが、姫にだけは一目会いたい。」

わたしは御心中を思いやりながら、ただ涙ばかり拭っていました。

「しかし会えぬものならば、――泣くな。有王。いや、泣きたければ泣いても好い。しかしこの娑婆世界には、一々泣いては泣き尽せぬほど、悲しい事が沢山あるぞ。」

御主人は後の黒木の柱に、ゆっくり背中を御寄せ

になってから、寂しそうに御微笑なさいました。
「女房も死ぬ。若も死ぬ。姫には一生会えぬかも知れぬ。屋形や山荘もおれの物ではない。おれは独り離れ島に老の来るのを待っている。——これがおれの今のさまじゃ。が、この苦艱を受けているのは、何もおれ一人に限った事ではない。おれ一人衆苦の大海に、没在していると考えるのは、仏弟子にも似合わぬ増長慢じゃ。『増長驕慢、尚非世俗白衣所宜。』艱難の多いのに誇る心も、やはり邪業には違いあるまい。その心さえ除いてしまえば、この粟散辺土の中にも、おれほどの苦を受けて

いるものは、恒河沙(ごうがしゃ)の数(かず)より多いかも知れぬ。いや、人界(にんがい)に生れ出たものは、たといこの島に流されずとも、皆おれと同じように、孤独の歎(たん)を洩(も)らしているのじゃ。村上(むらかみ)の御門(みかど)第七の王子、二品中務親王(にほんなかつかさしんのう)、六代の後胤(こういん)、仁和寺(にんなじ)の法印寛雅(ほういんかんが)が子、京極(きょうごく)の源大納言雅俊卿(みなもとのだいなごんまさとしきょう)の孫に生れたのは、こう云う俊寛(しゅんかん)一人じゃが、天(あめ)が下(した)には千の俊寛、万の俊寛、十万の俊寛、百億の俊寛が流されているぞ。——」

俊寛様はこうおっしゃると、たちまち御眼(おんめ)のどこかに、陽気な御気色(みけしき)が閃(ひらめ)きました。

「一条二条の大路(おおじ)の辻に、盲人が一人さまようている

のは、世にも憐（あわ）れに見えるかも知れぬ。が、広い洛中洛外（らくちゅうらくがい）、無量無数の盲人どもに、充ち満ちた所を眺めたら、——有王（ありおう）。お前はどうすると思う？　おれならばまっ先にふき出してしまうぞ。おれの島流しも同じ事じゃ。十方（じっぽう）に遍満（へんまん）した俊寛どもが、皆ただ一人流されたように、泣きつ喚（わめ）きつしていると思えば、涙の中（うち）にも笑わずにはいられぬ。有王。三界一心（さんがいいっしん）と知った上は、何よりもまず笑う事を学べ。笑う事を学ぶためには、まず増長慢を捨てねばならぬ。世尊（せそん）の御出世（ごしゅっせ）は我々衆生（しゅじょう）に、笑う事を教えに来られたのじゃ。大般涅槃（だいはつねはん）の御時（おんとき）にさえ、摩訶伽葉（まかかしょう）は笑ったではない

か？」
その時はわたしもいつのまにか、頬（ほお）の上に涙が乾いていました。すると御主人は簾（すだれ）越しに、遠い星空を御覧になりながら、
「お前が都へ帰ったら、姫にも歎きをするよりは、笑う事を学べと云ってくれい。」と、何事もないようにおっしゃるのです。
「わたしは都へは帰りません。」
もう一度わたしの眼の中には、新たに涙が浮んで来ました。今度はそう云う御言葉を、御恨（おうら）みに思った涙なのです。

「わたしは都にいた時の通り、御側勤(おそばづと)めをするつもりです。年とった一人の母さえ捨て、兄弟にも仔細(しさい)は話さずに、はるばるこの島へ渡って来たのは、そのためばかりではありませんか？　わたしはそうおっしゃられるほど、命が惜いように見えるでしょうか？　わたしはそれほど恩義を知らぬ、人非人(にんぴにん)のように見えるでしょうか？　わたしはそれほど、――」

「それほど愚かとは思わなかった。」

御主人はまた前のように、にこにこ御笑いになりました。

「お前がこの島に止(とど)まっていれば、姫の安否(あんぴ)を知らせ

るのは、誰がほかに勤めるのじゃ？　おれは一人でも不自由はせぬ。まして梶王と云う童がいる。——と云ってもまさか妬みなぞはすまいな？　あれは便りのないみなし児じゃ。幼い島流しの俊寛じゃ。お前は便船のあり次第、早速都へ帰るが好い。その代り今夜は姫への土産に、おれの島住いがどんなだったか、それをお前に話して聞かそう。またお前は泣いているな？　よしよし、ではやはり泣きながら、おれの話を聞いてくれい。おれは独り笑いながら、勝手に話を続けるだけじゃ。」

　俊寛様は悠々と、芭蕉扇を御使いなさりながら、

島住居（しまずまい）の御話をなさり始めました。軒先（のきさき）に垂れた簾（すだれ）の上には、ともし火の光を尋ねて来たのでしょう、かすかに虫の這（は）う音が聞えています。わたしは頭を垂れたまま、じっと御話に伺い入りました。

四

「おれがこの島へ流されたのは、治承（じしょう）元年七月の始じゃ。おれは一度も成親（なりちか）の卿（きょう）と、天下なぞを計った覚えはない。それが西八条（にしはちじょう）へ籠（こ）められた後（のち）、いきなり、この島へ流されたのじゃから、始はおれも忌々（いまいま）しさの

余り、飯を食う気さえ起らなかった。」
「しかし都の噂（うわさ）では、――」
わたしは御言葉を遮（さえぎ）りました。
「僧都（そうず）の御房（ごぼう）も宗人（むねと）の一人に、おなりになったとか云う事ですが、――」
「それはそう思うに違いない。成親の卿さえ宗人の一人に、おれを数えていたそうじゃから、――しかしおれは宗人ではない。浄海入道（じょうかいにゅうどう）の天下が好（よ）いか、成親の卿の天下が好いか、それさえおれにはわからぬほどじゃ。事によると成親の卿は、浄海入道よりひがんでいるだけ、天下の政治には不向きかも知れぬ。おれは

ただ平家の天下は、ないに若かぬと云っただけじゃ。源平藤橘、どの天下も結局あるのはないに若かぬ。この島の土人を見るが好い。平家の代でも源氏の代でも、同じように芋を食うては、同じように子を生んでいる。天下の役人は役人がいぬと、天下も亡ぶように思っているが、それは役人のうぬ惚れだけじゃ。」

「が僧都の御房の天下になれば、何御不足にもありますまい。」

俊寛様の御眼の中には、わたしの微笑が映ったように、やはり御微笑が浮びました。

「成親の卿の天下同様、平家の天下より悪いかも知れ

ぬ。何故(なぜ)と云えば俊寛は、浄海入道(じょうかいにゅうどう)より物わかりが好(よ)い。物わかりが好ければ政治なぞには、夢中になれぬ筈ではないか？　理非曲直(りひきょくちょく)も弁(わきま)えずに、途方(とほう)もない夢ばかり見続けている、——そこが高平太(たかへいだ)の強い所じゃ。小松(こまつ)の内府(ないふ)なぞは利巧なだけに、天下を料理するとなれば、浄海入道より数段下じゃ。内府も始終病身じゃと云うが、平家一門のためを計(はか)れば、一日も早く死んだが好(よ)い。その上またおれにしても、食色(じきしき)の二性を離れぬ事は、浄海入道と似たようなものじゃ。そう云う凡夫(ぼんぷ)の取った天下は、やはり衆生(しゅじょう)のためにはならぬ。所詮人界(しょせんにんがい)が浄土になるには、御仏(みほとけ)の御天下(おんてんか)を

待つほかはあるまい。——おれはそう思っていたから、天下を計る心なぞは、微塵も貯えてはいなかった。」
「しかしあの頃は毎夜のように、中御門高倉の大納言様へ、御通いなすったではありませんか？」
　わたしは御不用意を責めるように、俊寛様の御顔を眺めました、ほんとうに当時の御主人は、北の方の御心配も御存知ないのか、夜は京極の御屋形にも、滅多に御休みではなかったのです。しかし御主人は不相変、澄ました御顔をなすったまま、芭蕉扇を使っていらっしゃいました。
「そこが凡夫の浅ましさじゃ。ちょうどあの頃あの屋

形には、鶴の前と云う上童があった。これがいかなる天魔の化身か、おれを捉えて離さぬのじゃ。おれの一生の不仕合わせは、皆あの女がいたばかりに、降って湧いたと云うても好い。女房に横面を打たれたのも、鹿ヶ谷の山荘を仮したのも、しまいにこの島へ流されたのも、——しかし有王、喜んでくれい。おれは鶴の前に夢中になっても、謀叛の宗人にはならなかった。女人に愛楽を生じたためしは、古今の聖者にも稀ではない。大幻術の摩登伽女には、阿難尊者さえ迷わせられた。竜樹菩薩も在俗の時には、王宮の美人を偸むために、隠形の術を修せられたそうじゃ。しかし謀叛

人になった聖者は、天竺震旦本朝を問わず、ただの一人もあった事は聞かぬ。これは聞かぬのも不思議はない。女人に愛楽を生ずるのは、五根の欲を放つだけの事じゃ。が、謀叛を企てるには、貪嗔癡の三毒を具えねばならぬ。聖者は五欲を放たれても、三毒の害は受けられぬのじゃ。して見ればおれの知慧の光も、五欲のために曇ったと云え、消えはしなかったと云わねばなるまい。――が、それはともかくも、おれはこの島へ渡った当座、毎日忌々しい思いをしていた。」

「それはさぞかし御難儀だったでしょう。御食事は勿論、御召し物さえ、御不自由勝ちに違いありませんか

ら。」

「いや、衣食は春秋二度ずつ、肥前の国鹿瀬の荘から、少将のもとへ送って来た。鹿瀬の荘は少将の舅、平の教盛の所領の地じゃ。その上おれは一年ほどたつと、この島の風土にも慣れてしまった。が、忌々しさを忘れるには、一しょに流された相手が悪い。丹波の少将成経などは、ふさいでいなければ居睡りをしていた。」

「成経様は御年若でもあり、父君の御不運を御思いになっては、御歎きなさるのもごもっともです。」

「何、少将はおれと同様、天下はどうなってもかまわ

ぬ男じゃ。あの男は琵琶でも掻き鳴らしたり、桜の花でも眺めたり、上臈に恋歌でもつけていれば、それが極楽じゃと思うている。じゃからおれに会いさえすれば、謀叛人の父ばかり怨んでいた。」

「しかし康頼様は僧都の御房と、御親しいように伺いましたが。」

「ところがこれが難物なのじゃ。康頼は何でも願さえかければ、天神地神諸仏菩薩、ことごとくあの男の云うなり次第に、利益を垂れると思うている。つまり康頼の考えでは、神仏も商人と同じなのじゃ。ただ神仏は商人のように、金銭では冥護を御売りにならぬ。

じゃから祭文を読む。香火を供える。この後の山なぞには、姿の好い松が沢山あったが、皆康頼に伐られてしもうた。伐って何にするかと思えば、千本の卒塔婆を拵えた上、一々それに歌を書いては、海の中へ抛りこむのじゃ。おれはまだ康頼くらい、現金な男は見た事がない。」

「それでも莫迦にはなりません。都の噂ではその卒塔婆が、熊野にも一本、厳島にも一本、流れ寄ったとか申していました。」

「千本の中には一本や二本、日本の土地へも着きそうなものじゃ。ほんとうに冥護を信ずるならば、たった

一本流すが好い。その上康頼は難有そうに、千本の卒塔婆を流す時でも、始終風向きを考えていたぞ。いつかおれはあの男が、海へ卒塔婆を流す時に、帰命頂礼熊野三所の権現、分けては日吉山王、王子の眷属、総じては上は梵天帝釈、下は堅牢地神、殊には内海外海竜神八部、応護の眦を垂れさせ給えと唱えたから、その跡へ並びに西風大明神、黒潮権現も守らせ給え、謹上再拝とつけてやった。」

「悪い御冗談をなさいます。」

わたしもさすがに笑い出しました。

「すると康頼は怒ったぞ。ああ云う大嗔恚を起すよう

では、現世利益はともかくも、後生往生は覚束ないものじゃ。——が、その内に困まった事には、少将もいつか康頼と一しょに、神信心を始めたではないか？　それも熊野とか王子とか、由緒のある神を拝むのではない。この島の火山には鎮護のためか、岩殿と云う祠がある。その岩殿へ詣でるのじゃ。——火山と云えば思い出したが、お前はまだ火山を見た事はあるまい？」

「はい、たださっき榕樹の梢に、薄赤い煙のたなびいた、禿げ山の姿を眺めただけです。」

「では明日でもおれと一しょに、頂へ登って見るが好

い。頂へ行けばこの島ばかりか、大海の景色は手にとるようじゃ。岩殿の祠も途中にある、——その岩殿へ詣でるのに、康頼はおれにも行けと云うたが、おれは容易（ようい）には行こうとは云わぬ。」

「都では僧都（そうず）の御房（ごぼう）一人、そう云う神詣でもなさらないために、御残されになったと申して居ります。」

「いや、それはそうかも知れぬ。」

俊寛様は真面目（まじめ）そうに、ちょいと御首を御振りになりました。

「もし岩殿に霊があれば、俊寛一人を残したまま、二人の都返りを取り持つくらいは、何とも思わぬ禍津神（まがつがみ）

じゃ。お前はさっきおれが教えた、少将の女房を覚えているか？　あの女もやはり岩殿へ、少将がこの島を去らぬように、毎日毎夜詣でたものじゃ。所がその願（がん）は少しも通らぬ。すると岩殿と云う神は、天魔にも増した横道者（おうどうもの）じゃ。天魔には世尊御出世（せそんごしゅっせい）の時から、諸悪を行うと云う戒行（かいぎょう）がある。もし岩殿の神の代りに、天魔があの祠にいるとすれば、少将は都へ帰る途中、船から落ちるか、熱病になるか、とにかくに死んだのに相違ない。これが少将もあの女も、同時に破滅させる唯一の途（みち）じゃ。が、岩殿は人間のように、諸善ばかりも行わねば、諸悪ばかりも行わぬらしい。もっとも

これは岩殿には限らぬ。奥州名取郡笠島（おうしゅうなとりのこおりかさじま）の道祖（さえ）は、都の加茂河原（かもがわら）の西、一条の北の辺（ほとり）に住ませられる、出雲路（いずもじ）の道祖（さえ）の御娘（おんむすめ）じゃ。が、この神は父の神が、まだ聟（むこ）の神も探されぬ内に、若い都の商人（あきゅうど）と妹背（いもせ）の契（ちぎり）を結んだ上、さっさと奥へ落ちて来られた。こうなっては凡夫も同じではないか？　あの実方（さねかた）の中将は、この神の前を通られる時、下馬（げば）も拝（はい）もされなかったばかりに、とうとう蹴殺（けころ）されておしまいなすった。こう云う人間に近い神は、五塵を離れていぬのじゃから、何を仕出かすか油断はならぬ。このためしでもわかる通り、一体神と云うものは、人間離れをせぬ限り、崇（あが）め

ろと云えた義理ではない。——が、そんな事は話の枝葉じゃ。康頼と少将とは一心に、岩殿詣でを続け出した。それも岩殿を熊野になぞらえ、あの浦は和歌浦、この坂は蕪坂なぞと、一々名をつけてやるのじゃから、まず童たちが鹿狩と云っては、小犬を追いまわすのも同じ事じゃ。ただ音無の滝だけは本物よりもずっと大きかった。」

「それでも都の噂では、奇瑞があったとか申していますが。」

「その奇瑞の一つはこうじゃ。結願の当日岩殿の前に、二人が法施を手向けていると、山風が木々を煽った

拍子（ひょうし）に、椿（つばき）の葉が二枚こぼれて来た。その椿の葉には二枚とも、虫の食った跡（あと）が残っている。それが一つには帰雁（きがん）とあり、一つには二とあったそうじゃ。合せて読めば帰雁二（きがんに）となる、――こんな事が嬉しいのか、康頼は翌日得々（とくとく）と、おれにもその葉を見せなぞした。成程二とは読めぬでもない。が、帰雁（きがん）はいかにも無理じゃ。おれは余り可笑（おか）しかったから、次の日山へ行った帰りに、椿の葉を何枚も拾って来てやった。その葉の虫食いを続けて読めば、帰雁二どころの騒（さわ）ぎではない。『明日帰洛（みょうにちきらく）』と云うのもある。『清盛横死（きよもりおうし）』と云うのもある。『康頼往生（おうじょう）』と云うのもある。おれはさぞ

かし康頼も、喜ぶじゃろうと思うたが、――」

「それは御立腹なすったでしょう。」

「康頼は怒るのに妙を得ている。舞も洛中に並びないが、腹を立てるのは一段と巧者じゃ。あの男は謀叛なぞに加わったのも、嗔恚に牽かれたのに相違ない。その嗔恚の源はと云えば、やはり増長慢のなせる業じゃ。平家は高平太以下皆悪人、こちらは大納言以下皆善人、――康頼はこう思うている。そのうぬ惚れがためにならぬ。またさっきも云うた通り、我々凡夫は誰も彼も、皆高平太と同様なのじゃ。が、康頼の腹を立てるのが好いか、少将のため息をするのが好いか、

どちらが好いかはおれにもわからぬ。」
「成経様御一人だけは、御妻子もあったそうですから、御紛れになる事もありましたろうに。」
「ところが始終蒼い顔をしては、つまらぬ愚痴ばかりこぼしていた。たとえば谷間の椿を見ると、この島には桜も咲かないと云う。火山の頂の煙を見ると、この島には青い山もないと云う。何でもそこにある物は云わずに、ない物だけ並べ立てているのじゃ。一度なぞはおれと一しょに、磯山へ橐吾を摘みに行ったら、ああ、わたしはどうすれば好いのか、ここには加茂川の流れもないと云うた。おれがあの時吹き出さなかった

のは、我立つ杣の地主権現、日吉の御冥護に違いない。が、おれは莫迦莫迦しかったから、ここには福原の獄もない、平相国入道浄海もいない、難有い難有いとこう云うた。」

「そんな事をおっしゃっては、いくら少将でも御腹立ちになりましたろう。」

「いや、怒られれば本望じゃ。が、少将はおれの顔を見ると、悲しそうに首を振りながら、あなたには何もおわかりにならない、あなたは仕合せな方ですと云うた。ああ云う返答は、怒られるよりも難儀じゃ。おれは、——実はおれもその時だけは、妙に気が沈んでし

もうた。　もし少将の云うように、　何もわからぬおれじゃったら、　気も沈まずにすんだかも知れぬ。　しかしおれにはわかっているのじゃ。　おれも一時は少将のように、　眼の中の涙を誇ったことがある。　その涙に透(す)かして見れば、　あの死んだ女房(にょうぼう)も、　どのくらい美しい女に見えたか、　――おれはそんな事を考えると、　急に少将が気の毒になった。　が、　気の毒になって見ても、　可笑(おか)しいものは可笑しいではないか？　そこでおれは笑いながら、　言葉だけは真面目(まじめ)に慰めようとした。　おれが少将に怒られたのは、　跡にも先にもあの時だけじゃ。　少将はおれが慰めてやると、　急に恐しい顔をし

ながら、嘘をおつきなさい。わたしはあなたに慰められるよりも、笑われる方が本望ですと云うた。その途端（とたん）に、――妙ではないか？　とうとうおれは吹き出してしもうた。」

「少将はどうなさいました？」

「四五日の間はおれに遇（お）うても、挨拶（あいさつ）さえ碌（ろく）にしなかった。が、その後（のち）また遇うたら、悲しそうに首を振っては、ああ、都へ返りたい、ここには牛車（ぎっしゃ）も通らないと云うた。あの男こそおれより仕合せものじゃ。――が、少将や康頼（やすより）でも、やはり居らぬよりは、いた方が好（よ）い。二人に都へ帰られた当座、おれはまた二年ぶり

に、毎日寂しゅうてならなかった。」

「都の噂（うわさ）では御寂しいどころか、御歎き死（じ）にもなさり兼ねない、御容子（ごようす）だったとか申していました。」

わたしは出来るだけ細々（こまごま）と、その御噂を御話しました。琵琶法師（びわほうし）の語る言葉を借りれば、

「天に仰ぎ地に俯（ふ）し、悲しみ給えどかいぞなき。……猶（なお）も船の纜（ともづな）に取りつき、腰になり脇になり、丈（たけ）の及ぶほどは、引かれておわしけるが、丈も及ばぬほどにもなりしかば、また空（むな）しき渚（なぎさ）に泳ぎ返り、……是具（これぐ）して行けや、我（われ）乗せて行けやとて、おめき叫び給えども、漕（こ）ぎ行く船のならいにて、跡は白浪（しらなみ）ばかりなり。」と云

う、御狂乱の一段を御話したのです。俊寛様は御珍しそうに、その話を聞いていらっしゃいましたが、まだ船の見える間は、手招ぎをなすっていらしったと云う、今では名高い御話をすると、

「それは満更嘘ではない。何度もおれは手招ぎをした。」と、素直に御頷きなさいました。

「では都の噂通り、あの松浦の佐用姫のように、御別れを御惜しみなすったのですか？」

「二年の間同じ島に、話し合うた友だちと別れるのじゃ。別れを惜しむのは当然ではないか？　しかし何度も手招ぎをしたのは、別れを惜しんだばかりではな

い。――一体あの時おれの所へ、船のはいったのを知らせたのは、この島にいる琉球人じゃ。それが浜べから飛んで来ると、息も切れ切れに船々と云う。船はまずわかったものの、何の船がはいって来たのか、そのほかの言葉はさっぱりわからぬ。あれはあの男もうろたえた余り、日本語と琉球語とを交る交る、饒舌っていたのに違いあるまい。おれはともかくも船と云うから、早速浜べへ出かけて見た。すると浜べにはいつのまにか、土人が大勢集っている。その上に高い帆柱のあるのが、云うまでもない迎いの船じゃ。おれもその船を見た時には、さすがに心が躍るような気がした。

少将や康頼はおれより先に、もう船の側へ駈けつけていたが、この喜びようも一通りではない。現にあの琉球人なぞは、二人とも毒蛇に噛まれた揚句、気が狂ったのかと思うたくらいじゃ。その内に六波羅から使に立った、丹左衛門尉基安は、少将に赦免の教書を渡した。が、少将の読むのを聞けば、おれの名前がはいっていない。おれだけは赦免にならぬのじゃ。――そう思ったおれの心の中には、わずか一弾指の間じゃが、いろいろの事が浮んで来た。姫や若の顔、女房の罵る声、京極の屋形の庭の景色、天竺の早利即利兄弟、震旦の一行阿闍梨、本朝の実方の朝臣、――とても一々

数えてはいられぬ。ただ今でも可笑しいのは、その中にふと車を引いた、赤牛の尻が見えた事じゃ。しかしおれは一心に、騒がぬ容子をつくっていた。勿論少将や康頼は、気の毒そうにおれを慰めたり、俊寛も一しょに乗せてくれいと、使にも頼んだりしていたようじゃ。が、赦免の下らぬものは、何をどうしても、船へは乗れぬ。おれは不動心を振い起しながら、何故おれ一人赦免に洩れたか、その訳をいろいろ考えて見た。高平太はおれを憎んでいる。――それも確かには違いない。しかし高平太は憎むばかりか、内心おれを恐れている。おれは前の法勝寺の執行じゃ。兵仗の道は

知る筈がない。が、天下は思いのほか、おれの議論に応ずるかも知れぬ。——高平太はそこを恐れているのじゃ。おれはこう考えたら、苦笑（くしょう）せずにはいられなかった。山門や源氏（げんじ）の侍どもに、都合（つごう）の好（い）い議論を拵（こしら）えるのは、西光法師（さいこうほうし）などの嵌（はま）り役じゃ。おれは眇（びょう）たる一平家（へいけ）に、心を労するほど老耄（おいぼ）れはせぬ。さっきもお前に云うた通り、天下は誰でも取っているが好（い）い。おれは一巻の経文（きょうもん）のほかに、鶴（つる）の前（まえ）でもいれば安堵（あんど）している。しかし浄海入道（じょうかいにゅうどう）になると、浅学短才の悲しさに、俊寛も無気味（ぶきみ）に思うているのじゃ。して見れば首でも刎（は）ねられる代りに、この島に一人残されるの

は、まだ仕合せの内かも知れぬ。――そんな事を思うている間（あいだ）に、いよいよ船出と云う時になった。すると少将の妻になった女が、あの赤児を抱いたまま、どうかその船に乗せてくれいと云う。おれは気の毒に思うたから、女は咎（とが）めるにも及ぶまいと、使の基安（もとやす）に頼んでやった。が、基安は取り合いもせぬ。あの男は勿論役目のほかは、何一つ知らぬ木偶（でく）の坊じゃ。おれもあの男は咎めずとも好（い）い。ただ罪の深いのは少将じゃ。――」

俊寛様は御腹立たしそうに、ばたばた芭蕉扇（ばしょうせん）を御使いなさいました。

「あの女は気違いのように、何でも船へ乗ろうとする。舟子たちはそれを乗せまいとする。とうとうしまいにあの女は、少将の直垂の裾を摑んだ。すると少将は蒼い顔をしたまま、邪慳にその手を刎ねのけたではないか？　女は浜べに倒れたが、それぎり二度と乗ろうともせぬ。ただおいおい泣くばかりじゃ。おれはあの一瞬間、康頼にも負けぬ大嗔恚を起した。少将は人畜生じゃ。康頼もそれを見ているのは、仏弟子の所業とも思われぬ。おまけにあの女を乗せる事は、おれのほかに誰も頼まなかった。――おれはそう思うたら、今でも不思議な気がするくらい、ありとあらゆ

る罵詈讒謗（ばりざんぼう）が、口を衝（つ）いて溢（あふ）れて来た。もっともおれの使ったのは、京童（きょうわらべ）の云う悪口（あっこう）ではない。八万法蔵（はちまんほうぞう）十二部経中（じゅうにぶきょうちゅう）の悪鬼羅刹（あっきらせつ）の名前ばかり、矢つぎ早に浴びせたのじゃ。が、船は見る見る遠ざかってしまう。あの女はやはり泣き伏したままじゃ。おれは浜べにじだんだを踏（ふ）みながら、返せ返せと手招ぎをした。」

御主人の御腹立ちにも関（かかわ）らず、わたしは御話を伺っている内に、自然とほほ笑（え）んでしまいました。すると御主人も御笑いになりながら、

「その手招ぎが伝わっているのじゃ。嗔恚の祟（たた）りはそこにもある。あの時おれが怒（おこ）りさえせねば、俊寛は都

へ帰りたさに、狂いまわったなぞと云う事も、口(くち)の端(は)へ上(のぼ)らずにすんだかも知れぬ。」と、仕方がなさそうにおっしゃるのです。

「しかしその後(のち)は格別(かくべつ)に、御歎きなさる事はなかったのですか？」

「歎(なげ)いても仕方はないではないか？　その上(うえ)時のたつ内には、寂しさも次第に消えて行った。おれは今では己身(こしん)の中(うち)に、本仏(ほんぶつ)を見るより望みはない。自土即浄土(じどそくじょうど)と観じさえすれば、大歓喜(だいかんぎ)の笑い声も、火山から炎(ほのお)の迸(ほどばし)るように、自然と湧(わ)いて来なければならぬ。おれはどこまでも自力(じりき)の信者じゃ。——おお、まだ一つ忘

れていた。あの女は泣き伏したぎり、いつまでたっても動こうとせぬ。その内に土人も散じてしまう。船は青空に紛れるばかりじゃ。おれは余りのいじらしさに、慰めてやりたいと思うたから、そっと後手に抱き起そうとした。するとあの女はどうしたと思う？　いきなりおれをはり倒したのじゃ。おれは目が眩らみながら、仰向けにそこへ倒れてしもうた。おれの肉身に宿らせ給う、諸仏諸菩薩諸明王も、あれには驚かれたに相違ない。しかしやっと起き上って見ると、あの女はもう村の方へ、すごすご歩いて行く所じゃった。何、おれをはり倒した訳か？　それはあの女に聞いたが好い。

が、事によると人気（ひとけ）はなし、凌（りょう）ぜられるとでも思ったかも知れぬ。」

五

わたしは御主人とその翌日、この島の火山へ登りました。それから一月ほど御側（おそば）にいた後（のち）、御名残り惜しい思いをしながら、もう一度都へ帰って来ました。「見せばやなわれを思わむ友もがな磯（いそ）のとまやの柴（しば）の庵（いおり）を」——これが御形見（おかたみ）に頂いた歌です。俊寛（しゅんかん）様はやはり今でも、あの離れ島の笹葺（ささぶ）きの家に、相不変（あいかわらず）御一

人悠々と、御暮らしになっている事でしょう。事によると今夜あたりは、琉球芋（りゅうきゅういも）を召し上りながら、御仏（みほとけ）の事や天下の事を御考えになっているかも知れません。そう云う御話はこのほかにも、まだいろいろ伺ってあるのですが、それはまたいつか申し上げましょう。

（大正十年十二月）

底本：「芥川龍之介全集４」ちくま文庫、筑摩書房
　　１９８７（昭和62）年１月27日第１刷発行
　　１９９３（平成５）年12月25日第６刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房
　　１９７１（昭和46）年３月～１９７１（昭和46）年11月
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：j.utiyama
校正：かとうかおり

１９９８年12月19日公開
２００４年3月9日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。